




産土



彦島八幡宮社報
第52号

「日光照萬民 月色清人心
明るく豊かな暮らしでありますように」
宮司 柴田 宜夫

平成二十九年の清々しき新年を寿ぎ、謹んでお慶びを申し上げます。

毎月発行している宮司プレス、昨年発行した第百十八号では、十二ヶ月の呼び名の変遷について、記載しました。中国の王朝、国の名前が変わるたびに、「載(さい)」から「祀(し)」へと変遷したことを記載しました。日本で使われている「年」、これは、中国古代王朝の一つ、武王(ぶおう)が建てた「周(しゅう)」という王朝から用いられたそうです。この「年」は、稲のこともあり、日本人の折節(おりふし)、その季節の移ろいは、まさに、お正月から、稔りの秋の収穫までの歩みなのです。私共は、神様から命を戴いて、生かされて生きているのです。まさに、「載(さい)」です。やはり、感謝の誠をささげる、朝に祈り夕べに感謝という敬神生活を心掛けなければと思うのです。神を敬い、祖先を尊(たつと)ぶ、敬神崇祖(けいしんすう)その日々の暮らしが大切です。その日々の営みが「祀(し)」です。そして「年(ねん)」は、稔り、「稔(ねん)」にも通じるのですから、やはり、豊かな秋の収穫を迎えるという大目標を達成すべく、日々つとめる事が肝要(かんよう)です。頭書の言の葉は、当宮大鳥居の柱に刻み込まれているものです。前述した、「載」「祀」「年」、に込められた、敬神生活という心掛け、敬神崇祖の暮らし、大目標達成の日々のつとめを教え導く言の葉が、刻まれています。

じつは、この大鳥居は、紀元二千六百年を奉祝(ほうしゅく)して、建立されました。昭和十五年、七十名七年前のことです。当時としては、先見の明(めい)ある大鳥居といえるのではないのでしょうか。大型バスや大型トラック、トレーラーも、鳥居をくぐって、境内に入る事も可能なので、すから。その鳥居の柱の右側に日光照萬民(にっこうざうばん)に、左側に月色清人心(げつしよくせいじんしん)と刻まれているのです。

お日様の光は、分け隔(へだ)てもなく、全ての人に降りそそぎます。時には、日が陰(かげ)り、雨雲に覆(おお)われることもありましょう。しかし、必ずきつと、澄み切った青空を見上げることが出来ることを信じる、それこそが、神信心(かみしんじん)です。朝に祈り、希望を持ち続けることを誓(ちか)う、そのことが、「日光照萬民」なのです。そして、漆黒(しつこく)の夜空に浮かぶ月は、私共の心の暗闇(くらやみ)陰(かげ)りを取り払(はら)う、さやけき光(ひかり)でもあります。まさに、清め祓(はら)いです。心静かに一日を振り返りつつ、感謝を捧(たま)げ、これが、「月色清人心」です。

大自然に身をゆだね、生かされている私共、朝に祈り夕べに感謝という敬神生活を心掛け、「敬神崇祖」の日々の暮らしでありたいものです。「日光照萬民」「月色清人心」で、明るく豊かな暮らしでありますように。

八幡宮からのお知らせ

どんど焼き 二月十五日(日) 執行(午前十二時頃 忌火火入式)

※正月飾りは、みかん・橙(だいだい)を外して当日午前中までに
ご持参下さい。

執行後は来年まで受付致しませんので、予めご了承下さい。

⑨ 鏡餅・ビニール袋・結納品・人形・仏具・民芸品等は、
切お断りいたします。





宮司プレス総集編

※115号～118号(要点抜粋)を総集編としてお届けします。
全文ご覧になりたい方は八幡宮ホームページへアクセスしてください。

回 第一一五号 (平成二十八年六月六日)

◇我が国は、「課題先進国」といわれます。その典型が、少子化対策や労働力不足への対策、さらに、社会保険制度等の人口問題です。実は、課題先進国であることが問題なのではなくて、問題解決の後進国にとどまっていることが、日本にとつての最大の問題なのだそうです。その課題を克服しつつ、経済成長を続けていくためには、三つの制約を取り払う必要があるそうです。まずは、前述の人口です。二千三十年には、現在の一億二千万人強から一割ほど減少し、さらに、二千六十年には、三割減少します。人口減少は、成長の足かせとなります。もう一つの制約は、環境です。二千三十年の温暖化ガス削減目標は、平成二十五年(二十三年)比で、二十六パーセントの減です。温暖化ガス削減という制約と経済成長の両立を目指さなければなりません。さらに、格差です。地域間の格差や、雇用、さらに、所得、様々な格差問題が、社会の安定性と経済成長に対する制約となります。私共は、どのような心がまえで、日々の暮らしを送ったら、課題克服、三つの制約を取り払うことができるのでしょうか。私は、今こそ、古来、日本人が大事にしてきた、「仁義(じんぎ)」を見直す時ではないかと思えます。「仁」は、自分の近いところに及ぼす愛です。思いやり優しさ、人としての理想の姿でもあります。大事な家族や運命共同体としての地域社会です。「義」は、自分の遠いところに及ぼす愛です。今生かされている地域を超えた県や日本の国、この地球上すべての人類ではないでしょうか。自分を犠牲にして、世のため人のためにつくす、他人に幸福を与える、まさに、「利他(りた)」です。

◇江戸時代中期、破産寸前の米沢藩 現在の山形県を見事に立て直した上杉鷹山(うえすぎ ようざん)は、「自助・互助・扶助(三助)の順序」を誤らないことを改革の鉄則としました。病や不測(ふそく)の事故等で一家の働き手を欠き自助努力が無理になれば、親戚や隣近所が手を差し伸べる互助の精神を期待します。それではとても対処不能な大災害の時にこそ、公的扶助の出番だということです。上杉鷹山の改革の鉄則であるところの三助の自助・互助が、「仁」、近いところへの愛であり、扶助が、「義」、遠い所への愛になるのではないのでしょうか。まさに、「仁義」は、「相互規制、相互扶助」という、古き良き時代の、地域社会のありようそのものなのです。

◇クリエイトマネジメント協会の谷口代表は、幸せの三つの条件を、「好かれる人間になれ、役に立つ人間になれ、志のある人間になれ」と述べられています。神様から命を頂いて生かされている私共、人間の理想像である「仁」に近づく営みこそが、好かれる人間になることであります。志をもって、役に立つ人間になる、まさに、「仁義」は、幸せになる道のりといえるでしょう。私共も、上杉鷹山の「三助」の教え、谷口代表提唱の幸せの三つの条件の根底にある、「仁義」の生活を心がけたいものです。ご自愛をお祈り申し上げます。

回 第一一六号 (平成二十八年七月二十一日)

◇神社神道は、明浄(めいじょう)、を尊(とうと)ぶ宗教です。明浄は、清らかで明るい姿、それは、人間本来の姿で、神様が好まれる姿でもあるのです。したがって神社神道は、罪(つみや穢(けが)れ、汚濁(おたく)を嫌います。私共は、神様が好まれる姿に立ち返って、生活することが大切だと信じられてきたのです。

◇神社に参拝されたとき、境内の手水舎(てみずや)で手を洗い口を漱(すす)ぐのも、神職によるお祓(はら)いを受けるのも、心身の罪穢(れ)を祓(はら)い除(のぞ)いて、明浄なる、神様の好まれる人間本来の姿に立ち返る儀礼なのです。したがって、この儀礼なしには、神道は成立しないと云っても過言ではないと思えます。神様への祈願も、感謝も、奉告(ほうこく)も、慰霊(いれい)も、すべての神様への神事の事前となるのが、「清め」です。この清めのことを、神道では、「祓(はら)い」と呼んでいるのです。今月の当宮をはじめ、兼務社、末社(まつしや)の夏越(なごし)の神事は、明浄なる本来の神様の好まれる姿に立ち返る、清め祓(はら)い、最も重要な儀礼といえます。敵(おごそ)かに、遺漏(いろう)なく御奉仕(ごほうし)申し上げたいものです。

「ありきつつ きつつくれども いさぎよき 人の心さえ われ忘れぬや」
この和歌は、宮司プレス第一号にも掲載しましたが、詠(よ)み人知らずで、新古今和歌集(しんきんわかじゅう)に、おさめられています。永い人生をみてきたときに、心身ともに明浄なる者が、神の心にかない、幸せな人生をおくっているようにだという意味です。心身ともにいさぎよき、明浄な姿の大切さを論(ろん)しています。常日頃から心がけたいものです。

◇神様のことは、ただ「神」といえばいいのですが、「神明」とも申します。私共も、「神奉仕」ではなくて、「神明奉仕」と申し上げます。「神明」といえば、平安時代から伊勢の神宮さんのことです。神様のうちでも最も徳が高く、明らかな神様であるから、「神明」の文字を当てたそうです。このことを、林羅山(はやしらざん)の門下生で、寛文(かんぶん)年間、神需一致(しんじゅういち)の神道を説いた、宮城春意(みやぎしゅんい)は、「神は正直にして明らかなり、故に神明といふ」とおっしゃっています。明浄なる姿とは、身体が清浄で、心が正直なことなのです。

◇伊勢神道(いせしんとう)でも、倭姫命世紀(やまとひめのみことせいき)に、「正直の頭(こうべ)に神宿(かみ)る」と書かれています。「正」は、誠(まこと)いちらずに生きることで、「直」は、悪を反省し、少しでも善き方に向かおうと努力することです。神様は、そのような人々の心を喜ばれて、そば近く見守ってくださると説かれています。まさに、正直は、私の本年の書初めの「神喜(じんぎ)、神様の喜ばれる心なのです。

◇酷暑、猛暑の日々、明浄なる姿、人間本来の姿である、「身体清浄 心正直」で、乗り切り、神様の御心に叶って、幸せな日々でありたいものです。ご自愛をお祈り申しあげます。

回 第一一七号 (平成二十八年九月十三日)

◇古今和歌集の秋歌(しゅうか)の巻頭(かんとく)に、藤原敏行が詠(よ)んだ和歌が、「秋きぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる」です。立秋に詠まれた歌だと言われています。その歌のような折節(おりふし)となりました。◇先々月の七月の世界の平均気温は、昨年より〇.六度上昇上昇したそうでありまして、一、八八〇年に観測が始まって以来、史上最高の平均気温だったそうです。東北北海道地方に甚大な被害をもたらした台風十号は、昭和二十八年に台風の進路の観測が始まって、初の東北地方上陸という台風でした。小笠原諸島海域の海水温度が、三十度を超えたそう、複雑怪奇な進路となり、尊い人命を奪い大きな爪痕(つめあと)を残したものとなりました。確実に地球温暖化が加速しているようです。株式会社ジブリ会長の宮崎駿(みやざき はやお)さんは、「大切な自然を残そうと思つたら、その残そうとする自然を神社にするしかない」と仰っています。神社の杜(もり)のことを「神奈備(かなび)かんび」といいます。語源は、神様が宿る円錐(えんすい)の形をした山のことでありまして、奈良県の三輪山は、代表的な山です。八月十一日は、山の日と制定された祝日でしたが、国土地理院の二万五千分の一の地図には、「〇〇山」と記載されている山が、全国で一萬五千余りあるそう、市町村に平均して、九ないし十の山が存在する数なのだそうです。平成の大合併で、市町村が、広範囲になったとはいえ、驚くべき数ではないでしょうか。日本は、「海の国」「山の国」なのです。◇山を大切にすると、海に流れ出す川の水も沢山の養分を含み、魚も増えるわけですから、大自然を大切にすると、何気ない日々の暮らしのなかに、温暖化の加速を遅らせる一つの手立てがあるのかもしれない。そのような観点からも、鎮守の杜(もり)を奉護(ほうご)する、護り奉(たてまつ)る私共の使命は、よりいっそう大切なのであります。

◇「提灯を借りた恩は知れども天道(てんどう)の恩は忘れる」という諺(ことわざ)があります。闇夜(やみや)に迷っている時に借りた提灯のありがたさは、いつまでも忘れないが、同じく光を与えてくれる太陽の恵みは、あまりに大きいので、かえってその恩義を忘れてしまうという意味です。物に恵まれ、なにも不自由することなく、生活環境も充実している毎日は、それが、「当たり前」になってしまい、「ありがたい」という感謝の心を忘れてしまいがちです。じつは、「当たり前」の反対語は、「感謝する心」です。

江戸時代の国学者である本居宣長(もとより のりなが)の和歌に、「天地の神のめぐみし なかりせば 一と日一夜も ありえてましや」とあります。天地(あめつち)の神の恵みがあればこそ、毎日の生活も何事無く送ることが出来るのです。ありがたいという感謝の心、お陰様でという謙虚な気持ちを忘れない生活を心掛けたいものです。そして、神様、大自然、ご先祖様の恵み、大恩(だいおん)に報いる(報恩(ほうおん))の生活でありたいものです。ご自愛をお祈り申し上げます。

回 第一一八号 (平成二十八年十月二十一日)

◇中国の最古の王朝であった「夏(か)」という国では、一年の「年」のことを「載(さい)」と称していました。次の王朝である「商(しょう)」という国は、「祀(し)」と、称しました。実は、商という国は、古いや神事を重んじる国家でありました。戦場に赴(おもむ)く軍隊の先頭にも、「巫女(ふじよ)」という不思議な霊力を持った女性を配し、災厄(さいやく)を清めながら行進したそうです。日々、月々、その歳月の歩みが、まさに、祭事である「祀、祭祀」と共にあったのです。日本で使われている「年」、これは、「稲」のことなのです。春のお祭りである、「祈年祭(きねんさい)」は、五穀の豊穰を祈るお祭りです。そして、秋の収穫を迎えるための様々のお祭りを厳かに執行し、明日明後日の例大祭を迎えるわけです。神様に祈り、秋の稔りをあらかじめお祝いをして、神様とお約束を反故にしないよう努力を続けるのです。その過程には、いかなる試練があろうとも、きっと、神様がお守りくださることを信じて、常に、前向きに生活をする、そして、感謝の喜びの日を迎えるわけです。祈り、感謝、そして御加護を頂く、その一つのサイクルが、まさに、「一年」なのです。

◇神社神道で一番大切にしているのは、「祓(はら)い」です。自分自身の精神をまっさらに浄化するのですが、それは、自分自身の精神を高めることです。まず、自然の営みに感謝する素朴な気持ち、そして、すべての事象、出来事、物事が神様のお働きであることを受け入れる寛容さ、さらに、他人を敬う謙虚さ、この三つの心を取り戻すのが、心の浄化、未来を清める内清浄です。「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」という言葉があります。あれが悪い、これが悪いと人を責める気持ちを捨て、身のまわりに起こることすべてに感謝の心を持って自分を変えていく営み、まさに、外清浄内清浄、心が変わっていくのではないのでしょうか。江戸時代に「吉川神道」いう神道論を唱えた、吉川惟足(よしかわこれたる)は、「もろもろの 穢れの雲を 道(みち)ひなば 心の月は いつもさやけき」という和歌を残しています。心を月にたとえるならば、心の月が、いつも、清く潔(さや)けくあるためには、いつも、穢(けが)れを祓(はら)いやる努力が必要であると説いています。この穢れとは、本来的なものではなく、人の成長過程において、後天的(こうてんてき)についできたものですから、神様から頂いた正しい心こそ、清く潔(さや)けき心です。「心が変われば、行動が変わる、習慣が変わる、人格が変わる、出合いが変わる、運命が変わる」という言葉もあります。

アメリカのニューヨーク大学の研究によりますと、過去の幸福な記憶よりも未来に起こることの方を「明るい」と思う人が多く、しかも、脳は、未来の幸福な出来事を想像した時に最も活性化するように思われます。明日と明後日の例大祭は、神様から「載」している今ある命に感謝をして、外清浄内清浄の「祭祀」を厳粛に行い、無事に過ごせた「一年」の喜びを分かち合いたいとおもいます。そして、前向きな気持ちで人生を築(つく)むという神道の三本柱の一つである、未来志向で、活性化していきたいものです。ご自愛ください。

◆彦島八幡宮略記

当宮は平治元年(一一五九)十月十五日、本当開拓の主祖・河野通次こうのみらつぐ自ら祭主となり宇佐神宮より御祭神を勧請、祭祀なされたのであります。一名灘八幡と言っただけに宮の沖合を通過する船は必ず「半帆」の札をとつたと云われる事から造船、漁業関係者の崇敬が厚く、又、安産の神として別名子安八幡と崇められて併せて武神、文化神、生産神として御霊験あらたかな神様であります。尚、秋の例大祭「十月二十一日に近い土・日曜日」には八百五十七年伝来の無形民俗文化財「サイ上りさいあがり神事しんじ」があり由緒の深さを示しております。

＊光格殿と彦島八幡宮の発祥

保元二年(一一五七)十月のある日いつもの如く沖に出て漁をしていますと一

天俄にかき曇り末甲の方角の海上に紫雲たなびき海中より日月の如く光輝く物があるのを見て、通次等は不思議な思いで網を打って引き揚げるとそれは一台の明鏡でありました。しかも鏡の裏には八幡尊像が刻まれていたのです。通次等は大いに喜び、之は我ら一族の護り本尊であると、海辺の一小島(舞子島)の柵に一旦鏡を移し、その後祠を造営して鏡を納め光格殿こうかくてんと命名しました。これが当八幡宮の発祥であります。又舊記に海底より光り輝く物があり河野一族等銚にて之を突きし八幡尊像の左眼がささりて賜りたりと云々何れが真か確証しがたい。



◆年の初めに「彦島の原点」へ

彦島開拓の祖「彦島十二苗祖」の遺志が籠る墳墓へご参拝下さい

*下関市彦島迫町四丁目四・二二付近

当宮創祀者である河野通次こうのみらつぐは保元の乱に敗れた後、園田一覚、一見右京、小川甚六、片山藤蔵、柴崎甚平を率いて彦島の地に敗走し、その二十有余年後には、植田治郎、岡野将監、百合野民部、和田義信、登根金吾、富田刑部が来島して総勢十二名の将を中心一族郎党が農耕漁釣に精を出し彦島を開拓しました。以来「彦島十二苗祖」と称えられています。今日も末裔の方々が、「サイ上りさいあがり神事」をはじめとする伝統神事を継承されています。



社務目誌抄

(本宮祭典諸行事厳修報告)

平成二十八年七月〜十二月

文月(七月)

二十九日 夏越祭前夜祭・菅拔神事

*当宮では水無月の大祓に加え夏越の大祓も執行しています。カヤとヨモギで奉製した茅ノ輪を潜り、分魂を宿らせた人形を焚き上げる古式。罪・穢れを祓い清めました。

当宮では水無月晦日より一ヶ月の間に計二度奉製致します。



三十日 夏越祭御神幸祭

*御祭神の御霊を奉じた御神輿が氏子地域を中心に陸上海上を隈なく御神幸しました。



葉月 (八月)

十二日〜十六日 神道家中元祭齋行

* 上元(一月十五日)中元(七月十五日)下元(十月十五日)を先祖供養の日と定めた「みたま祭」の故事に肖り、日本人に親しみある盆行事の一環として毎年齋行致します。

長月 (九月)

十五日 観月祭

* 日本酒と共に名月を愛でながら、日本の風土、豊かな四季を大切にしてきた伝統的な日本人の「こころ」に思いを馳せました。



二十二日 秋分祭秋季祖霊祭

* 「祖先を敬い、亡くなられた人々を偲ぶ日」という秋分の日にちなみ、日毎ご加護をいただいている祖霊慰



神無月 (十月)

十七日 神嘗奉祝祭

* 伊勢の神宮で新穀が奉られ五穀の豊穰に感謝の祈りが捧げられました。この祭典を奉祝し当宮におきましても厳肅に齋行され、神宮を遥拝致しました。

二十二日 秋季例大祭前夜祭

二十三日 秋季例大祭本殿祭御神幸祭

* 神社本庁より幣帛が奉られ、一年に一度の大御祭が齋行されました。当宮創祀者の河野通次を偲び、八五七年伝統の無形民俗文化財指定「サイ上り神事」も厳かに執り収める事が出来ました。

霜月 (十一月)

三日 明治祭

* 戦前の明治節にあたり、四大節(四方拝(節)、紀元節、天長節、明治節)の一つです。明治天皇様のご生誕とご聖業を讃えるとともに、皇室の更なるご繁栄を祈願致しました。

十五日 七五三祭

* お子様のご成長をご祭神へご奉告し、ますますの健やかな成長を月次祭に併せお祈り申し上げます。



二十三日 新嘗祭

* 天皇陛下が五穀の新穀を天神地祇(てんじんちぎ)に勧め、また、自らもこれをお食しあそばされて、その年の収穫を感謝する古来より伝わる稲作儀礼の祭儀です。宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行われます。当宮におきましても、新穀をご祭神へお供え致し、収穫を神恩に感謝申し上げます。

師走 (十二月)

四日 大注連縄奉製・煤払式

* 神域と外界とを隔てる拝殿大注連縄の奉製が執行され、本年刈り取って干した稲藁を使用し、青々しい立派な大注連縄が掲げられました。終了後、煤払式を執行し一年間の汚れを掃き清めました。

二十三日 天長祭

* 今上陛下の御誕辰を言祝ぎ更なる皇室の弥栄をお祈りする祭典です。
天長祭とは、古来、唐の玄宗皇帝の誕生日を天長節と祝った事に由来します。天長とは老子の「天長地久」という言葉に由来し「天にとこしえなる事」の意を含んでいます。

正月臨時巫女奉仕者説明会

三十二日 大祓式

* 私たちが日常生活のなかで、知らず知らずに犯してしまった罪穢れを人形(ひとがた)に託して身体を清め、心新たに新年を迎え生活を営むべく、心技体を整えます。

新守札清祓式

除夜祭



平成二十八年八月七日(日)に開校した「まほろば学級」の参加児童から寄せられた感想文をご紹介致します。

情操教育の一環として、下関市教育委員会の後援のもと開催致しましてお蔭様をもちまして第十二回目を迎える事が叶いました。

彦島地区の小学校を通じて、夏季休暇前にご案内状を配布しております。**本年は八月六日(日)に開校予定です。**二日という短い時間では

ありますが、氏神さまの境内、鎮守の杜で楽しい時間を過ごしてみませんか。



まほろば学級に参加して
下関市立向井小学校 六年上野 環

私は、「まほろば学級」に参加し、たくさんさんの思い出ができました。神社での参拝作法をならったり、こま犬やご神馬、おみこしを見学しました。また、紙しばいとあんどん作りと花火など思いで深かったです。

紙しばいは、昔から伝わる話だったので彦島の歴史を少し知ることができました。絵が手書きだと知って驚きましたが、とても楽しかったです。



あんどん作りでは、私はあんどんの絵をリトルツインスターズ(キラキラ)にしました。組み立てが一番むずかしかったですが、夜になって真っ暗の中に火をともして歩くととてもきれいで、作ったかいいがありました。参道を歩くとき、ががくのえんそうがすこかったです。



花火は、打ち上げ花火に火をつける人がやけどを負うのではないかと、はらはらしたけど、無事ついてよかったです。とてもきれいでした。

まほろば学級では、友達ができたり、そうめん流しをしたり、宮司さんのためになるお話が聞けたり、神様のお部屋の近くまで行ったりと、ふだんできない貴重な体験ができました。まほろば学級に参加できて、よかったです。ありがとうございました。



氏子奉賛会便り

おおしめなわ

大注連縄掛替神事

奉製から掛替まで

去る十二月四日(日)、総代、氏子奉賛会、氏子青年会、敬神婦人会総勢六十名奉仕の下、拝殿大注連縄掛替神事が執行されました。本年刈り取って干した稲藁(糯米)を使用し、青々しい立派な大注連縄が奉製されました。毎年、師走の第一日曜日に執行し、恒例行事となっております。

※「古事記」に天照大御神様が須佐之男命の乱暴を畏れた天の岩戸に隠れられた時、「手力男之神、天照大御神ヲ天之石窟ヨリ引出奉リシ時、布刀玉之命、尻久米繩ヲ以テ、之ヨリ内ニ還リ入り給フナカレ」と記載があるように、天照大御神様を二度と天の岩戸に入れないようにと、布刀玉之命が塞いだ尻久米繩(しりくめなわ)が起源とされています。



敬神婦人会便り

去る十一月二十日(日)に敬神婦人会 柴田智江会長以下総勢三十名にて会員の親睦と研鑽を踏まえ、福岡県宗像市へ日帰りの研修旅行を執行致しました。

宗像大社 辺津宮 (ご祭神 市杵島姫神)へ正式参拝し、山口県ご出身の中原権禰宜様、黒神権禰宜様の丁寧なるご案内のもと神宝館特別展『宗



像・沖ノ島大宝展』を拝観させていただきました。古代祭祀の痕跡や東アジアとの交流の証しを通し、古代の人々の営みや息吹を肌で感じ得ることが出来た貴重な機会でありました。又、宗像大社の神宮寺でもある鎮国寺へも足を延ばし、紅葉の見頃を愛でる事が叶いました。





平成二十九年 年頭のご挨拶

下関市長 中尾友昭

新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、輝かしい新年を健やかに迎えのこととお慶び申し上げます。さて昨年を振り返りますと、ノーベル賞における日本人3年連続受賞や、日本中が沸き立ったリオデジャネイロ・オリンピックでのメダルラッシュ、中でも本市出身の柔道男子100kg超級の原沢久喜選手と、パラリンピック視覚障害女子マラソンの道下美里選手の銀メダル獲得は、市民の皆様にも勇気と希望を与える出来事でありました。

また一方で、4月には熊本・大分で、10月には鳥取県中部において大規模な地震が発生し、多くの尊い人命が奪われました。人智の及ばない自然の力の怖さを思い知る年でもあり、市長として改めて市民の安全・安心に向けた取組の必要性を認識いたしました。

本市におきましては、3月に下関市火の山ユースホステル『海峡の風』がリニューアルオープンするとともに、『下関市教育センター』がオープンいたしました。10月には釜山広域市との姉妹都市締結40周年を迎え、11月には『下関市立歴史博物館』が城下町長府にオープンするなど、皆様のご支援とご協力のお陰をもちまして、着実に市政経営を進めることができましたことに、心より感謝を申し上げます。

さて本年は、6月からJR西日本の周遊型豪華寝台列車『TWILIGHT EXPRESS 瑞風(みずかぜ)』の運行が開始されます。予定されている5コース中4コースにおいて下関駅が発着駅に指定されており、お客様を歓迎する様々なおもてなしや、行程の前後において本市の観光や宿泊につながる取組を進めてまいります。

さらに、外国クルーズ客船の誘致を引き続き進めてまいります。長州出島においては昨年7月に、県内初となる7万トン級の大型クルーズ客船が寄港したばかりですが、さらなる大型客船の寄港が可能となる施設整備を実施いたします。この秋には、13万トン級のクルーズ船が、接岸できるよう整備を完了させる計画です。今後も増加が期待できる訪日外国人の活力を適切にとらえ、地域経済の活性化につなげてまいります。

「住民自治のまちづくり」においては、昨年17地区全ての「まちづくり協議会」が設立され、いよいよ市民の皆様が自発的に課題を発見し、解決に向けての様々な取組が開始される予定です。ぜひ皆様のお知恵や貴重な経験を地域のために役立てていただきたいと思います。

地方創生の取組が加速化される中、人口減少の抑制と地域経済の活性化を図りつつ、人口構造の変化に対応したまちづくりの実現に向けて力強く前進していけるよう全力で取り組んでまいりますので、今後とも皆様のあたたかいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本年が皆様にとって良き年となりますよう心からお祈り申し上げます。年頭のご挨拶とさせていただきます。



年頭にあたりご挨拶

総代長 石崎幸亮

新年あけましてお目出とうございます。

昨年九月の神社役員総代会におきまして総代長のご指名をいただき緊張しております。昔、先々代の宮司さんに頼まれて、お宮に若い神職さんが奉職されるという事で氏子青年部を創り、将来の宮司さんを盛り上げようという事で『維蘇志会』若い氏子の会を創ったのが、私がお宮に関わった最初です。他の御社の会を参考にしたり、最初は皆夢中で、毎年の行事を行って来ましたが。今では、年間の主な行事のお手伝いが出来る様になりました。大変頼もしく嬉しい事です。地域の氏神として又、彦島という、どちらかと言えば特殊な地域で地元の方々の崇敬の念に守られながら年間の諸祭祀行事を行っております。

これからも特に若い人達の協力を得ながら、お宮の行事のお手伝いをして行きたいと思っております。後に続いてくれる子供達の為に、新しい行事や楽しい催しを考えて、地元の皆さんに愛されるお宮になる様、頑張つていきたいと思っております。

私も、総代長という重い役を汚す事のない様に今までより気を引き締めていきたいと思っております。

皆様の御指導、御鞭撻を宜しくお願い申し上げます。年頭のご挨拶と致します。

責任役員就任のご報告



辞令 和田博(彦島西山町)
彦島八幡宮責任役員とする。
(九月二十一日)

祭事暦 (平成二十九年上半期)

皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参拝下さい。

睦月 (一月)

- 一日 初太鼓 歳旦祭
- 三日 元始祭

天皇陛下御親ら宮中三殿(賢所、皇靈殿、神殿)において皇位の始源を祝し親祭あそばされます。当宮においても皇位を祝する祭祀が執行されます。

- 十五日 成人祭 (月次祭)

如月 (二月)

- 三日 節分祭追儺式
- 十一日 紀元祭建国奉祝祭

我国の初代天皇である神武天皇が橿原宮で即位された古えを偲び、建国創業の御神徳を景仰し、皇室国家の弥栄を祈念申し上げます。

- 十七日 祈年祭

「としごいのまつり」本年の五穀豊穣と皇室・国家の弥栄をご祈念申し上げます。

弥生 (三月)

- 二十日 春季祖霊祭

家の宗旨が神道の方の合同の先祖慰霊祭。「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」という「春分の日」を迎えるにあたり、自然万物に感謝の祈りを捧げる祭儀を斎行致します。

卯月 (四月)

- 二十九日 昭和祭

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、我国の将来に思いを馳せ、昭和天皇陛下のご聖徳をお讃え申し上げますとともに、ご皇室の弥栄と国家の繁栄を祈念致します。

皐月 (五月)

水無月 (六月)

- 三十日 大祓式

初詣のご案内

- 祈願 各種お祓いを受け付し、多種多様な守札を頒布致します。
- 元日限定 開運福引大会 一枚五〇〇円にて空クジなしです。例年午前中で完売致します。

● 電化製券旅行券、お米、握寿司等々豪華景品もりだくさんです！
皆様お誘いあわせの上、ご参拝下さい。

どんど焼き神事のご案内

- 一月十五日(日)

- 忌火点火式 午前十一時頃
- 正月神饌餅(焼き)のふるまい

★注意 どんど焼き以降、正月飾は受け付けておりませんのでご了承下さい。

節分祭のご案内

- 二月三日(金)

- 福引大会 午前一〇時〜午後七時三〇分
- 豆まき ①午後六時三〇分 ②七時三〇分

★第二回豆まき奉仕者募集

午後七時より合同にて特別祈願齋行後、豆まき奉仕をしていただきます。

※詳細は社務所までお問い合わせ下さい

〈初穂料五千円〉

境内桜の見頃

三月下旬から四月上旬にかけて

古来、春に里にやってくる福(さ)の神様が憑依する座(くら)だから「さくら」であるとも考えられています。富士山頂から花の種をまいて花を咲かせたとされる、木花之佐久夜毘売命(このはなのさくやひめのみこと)の「さくや」をとって「さくら」になった、とも言われています。



勸学祭のご案内

※新入生の学業成就・交通安全・無病息災を祈願申し上げます。
三月二日(水)〜五日(日)

- 受付時間 午前八時三〇分〜午後四時三〇分
- 初穂料/対象者 二千円/新年度新入生(園児・児童・生徒)
- 授与品 学業成就御守・学業上達鉛筆
- その他 ランドセル・学生カバン・体操着・文房具等をご持参下さい。

ご神前にてお清め致します。服装は制服でも平服でも構いません。



舟島神社例祭・佐々木小次郎 大人命慰霊祭のご案内

四月十五日(土)午前二〇時 於、巖流島(船島)

本年は決闘より四〇四年。小次郎大人命を偲んで決闘や巖流島に纏わる御神業や剣舞が奉納されます。
●ご参列、拝観自由(※彦島江浦渡船場から無料のチャーター船が運航します)



例祭厳修

平成二十八年十月二十二日～二十三日
御創祀八百五十七年例祭



サイ上がり神事(先舞役)



サイ上がり神事(後舞役)



御神幸祭行列



御旅所 潮搔神事



本殿祭境内



彦島十二苗祖集合写真



下関三井化学構内御旅所



本殿祭特殊献饌



本殿祭奉納芸能



御旅所鳥居『光格殿』扁額

例祭奉納 会社ご芳名

▼本殿祭神供物産品奉納会十二社

(三池屋、もずくセンター、
農水フーズ、中冷、ダイフク、
美栄水産、桃蔵水産、中村屋、
巖流本舗、マルイチ彦島醸造工場、
牡蠣小屋流王、ほんぼ)

▼彦島みそ マルイチ彦島醸造工場

▼豆腐百丁 高島豆腐店

▼設 営 副田工務所
タツミ電工

▼ひのき材 植田木材

▼ふるまい酒(関娘) 下関酒造

▼臨時駐車場 下関三井化学



奇跡を発動する神宿る磐座いわくら

彦島八幡宮ペトログラフィ

当宮には古代文字(シムメール文字)が刻銘された巨岩が奉安され、全国各地より参拝者が拝観のため訪れます。

自然崇拜にもとづく神宿る聖なる磐に神様を感じ、神様の威大なる力を戴かれて下さい。

※詳細は当宮ホームページをご参照下さい。



安産祈願祭・腹帯清祓のご案内

彦島八幡宮は別名『子安八幡』とも称され、安産の神様としても崇められております。

ご持参頂いた腹帯(ガードル)に当宮の「安産守護」の御朱印を押印させていただきます。

*平成二十九年下半期の戌の日

1月	11日(水)	先勝
	23日(月)	先勝
2月	4日(土)	友引
	16日(木)	友引
	28日(火)	仏滅
3月	12日(日)	仏滅
	24日(金)	仏滅
4月	5日(水)	大安
	17日(月)	大安
	29日(土)	先勝
5月	11日(木)	先勝
	23日(火)	先勝
6月	4日(日)	友引
	16日(金)	友引
	28日(水)	先負



方位除け祈願祭のご案内

年間を通して受付

●金神除けこんじんよけ

引越し、旅行、家の増改築、出張、転職等々、家の中の方位や、行く方向などをご祈願お祓いするものです。

はっぽうふさがりよけ

●八方塞り除け

平成二十九年の八方塞がり該当は本命星が「一白水星」の方です。



ひのととり 平成29年(丁酉)厄年・年祝表



(年祝)

上寿祝	大正 7年生(100歳)	数え年100歳のお祝い。
白寿祝	大正 8年生(99歳)	百から上の一を取ると白になり、数で云えば99である。
卒寿祝	昭和 3年生(90歳)	卒は略字で卒と書き九十と読む。
米寿祝	昭和 5年生(88歳)	米は字をわけると八十八となる。
傘寿祝	昭和13年生(80歳)	傘は略字で傘と書き八十と読む。
喜寿祝	昭和16年生(77歳)	喜は草書で喜と書き七十七と読む。
古稀祝	昭和23年生(70歳)	「人生七十古来稀なり」の漢詩にもとづく。
還暦祝	昭和32年生(61歳)	干支が丁度一巡し、誕生の年と同じになるので本卦返りともいう。

(厄年)

性別	年齢	前 厄	本 厄	後 厄
男	25歳	平成 6年生(24歳)いぬ	平成 5年生(25歳)とり	平成 4年生(26歳)さる
	42歳	昭和52年生(41歳)へび	昭和51年生(42歳)たつ	昭和50年生(43歳)うさぎ
	61歳	昭和33年生(60歳)いぬ	昭和32年生(61歳)とり	昭和31年生(62歳)さる
女	19歳	平成12年生(18歳)たつ	平成11年生(19歳)うさぎ	平成10年生(20歳)とら
	33歳	昭和61年生(32歳)とら	昭和60年生(33歳)うし	昭和59年生(34歳)ねずみ
	37歳	昭和57年生(36歳)いぬ	昭和56年生(37歳)とり	昭和55年生(38歳)さる

はっほうふさ (八方塞がり)

皆様一人一人の生年月日により九つの星“九星”に区分され星回りが存在します。中央を基点に、北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角をめぐり、九年に一度中央に入ります。これが八つの星(方位)に囲まれた状態である**はっほうふさ**八方塞がりです。不安定な年とされ、より注意をしなくてはならない年です。

八方除けの祈願や方位除けの御守をお受けになられ、御神慮を恐み慎む事をお勧め申し上げます。

本年は**いっばくすいせい**一白水星の方が該当致します。(以下に表記)

昭和2年、昭和11年、昭和20年、昭和29年、昭和38年、昭和47年、昭和56年
平成2年、平成11年、平成20年

※注意:ただし、それぞれ上記の年の立春2月4日~翌年の節分2月3日迄生まれの方が該当します。



(七五三祝)

祝	平成27年生の男女(3歳)	髪を伸ばし整え始めること。
祝	平成25年生の男子(5歳)	男の子が初めて袴をはき始める年齢。
祝	平成23年生の女子(7歳)	女の子が今までの紐付着物から帯を締める大人の着物に替える年齢。

祈願祭(お祓い)は数え年でお受けしましょう。

「数え年」は、生まれた時点を1歳とし、新年を迎える度に1歳加えて行きます。これは、正月に各家を訪れる年神様から1つ年を頂くというありがたい意味があります。満年齢に誕生日前であれば2歳、誕生日を迎えた後は1歳を加える解釈となります。

発行所 彦島八幡宮社務所
下関市彦島迫町五丁目十二番九号
TEL 〇八三二二六六一〇七〇〇
FAX 〇八三二二六六一五九一一
ホームページ <http://www.hikoshima-gu.net>

発行 柴田宜夫
題字者 柴田宜夫
編集者 山本光徳
平成二十九年一月一日

印刷・(株)ナカハラプリンテックス

彦島八幡宮会館 瑞鳳殿の御案内

お食事・仕出しはお任せ下さい

会席料理から各種オードブル、お刺身の盛合せ、御弁当までお気軽にご相談下さい。

(予約センター連絡先)
TEL 〇八三二二三四一〇七三 午前十時三十分～

▼**当日のお召し上げの場合**

- * 洋ホール二〜一〇〇名様まで対応
- * 和室十二畳(※六畳2部屋)
- 和室二十畳(※十畳2部屋)
- 【和室会席の場合】定員三十五名

▼**配達の場合**

- * 各種様々なお弁当・刺盛・オードブルを配達致します。
- お気軽にご相談下さい。

